

【ホームページ掲載バージョン】

マルチドメイン・オペレーションに至った背景
ーキャプストーン・ドクトリンから読み解く米陸軍の戦後の用兵思想の変遷ー

菅野 隆（教育訓練研究本部 研究部直轄研究員）

シリーズ（章）構成

目次	対象となる ドクトリン	シリーズ回	要約版の修親掲載号	
1 緒言	—	第1回	令和2年8月号	既掲
2 マルチドメイン ・オペレーション	2016, 17	第2回	令和2年9月号	既掲
3 冷戦黎明期	1949, 54, 62	第3回	令和2年10月号	既掲
4 ベトナム戦争期	1968	第4回	令和2年11月号	本稿
5 冷戦後期	1976, 82, 86	第5回	令和2年12月号	予定
6 ポスト冷戦期	1993, 2001, 08, 11	第6回	令和3年1月号	予定
7 総括	—	第7回	令和3年2月号	予定

「4 ベトナム戦争期」

目次

- (1) 戦争の概要
- (2) 大部隊の運用
- (3) 作戦レベルの行動
- (4) 認識した北ベトナム武装組織の特性
- (5) 戦術レベルの行動
- (6) 火力／機動・防護
- (7) 戦後の議論
- (8) 戦争の評価（軍事戦略以下）

4 ベトナム戦争期¹

((1) 戦争の概要)²

(第一次インドシナ戦争)

1938年の遷都で重慶に所在していた国民党政府は、連合国側の物資供与を受けており、その半分がベトナム北部の貿易港ハイフォン、中越国境沿いのランソンなどを經由する陸路によるものであった。支那事変の大陸での戦局打開のために、この援蒋ルートへの遮断が不可欠と判断した日本は、1940年9月、北部インドシナの占拠に踏み切る（フランス領インドシナ進駐、仏印進駐という。）。19世紀後半以降、インドシナ半島は植民地としてフランスの統治下にあったが、この時、既にフランスはドイツに降伏していたため、インドシナのフランス当局の抵抗はなかったとされる。そして、仏印進駐4日後に、日独伊三国同盟が締結され、このことが米国を刺激し、枢軸国に対する経済制裁に至ったと言われている。その後、日本は南部インドシナも手中に収め、これを受けて米国は、在米日本資産を凍結した上で、石油禁輸に踏み切り、ABCD 包囲網で日本に対する圧力を強め、太平洋戦争への道に至ったと言われている³。



ベトナム戦争関連地図

インドシナ半島は、北側の中国、西側のインドに挟まれるように位置し、ベンガル湾、南シナ海にせり出すように広がる。半島東南部からはマレー半島が突き出し、大・小スンダ列島、オーストラリアに至る。半島を南北に走るアンナン山脈は、半島を東西に区画する。

ベトナム（旧南・北ベトナム）は、アンナン山脈の東側、トンキン湾沿いの長い海岸線沿いに南北（3,500km）に細長く（17度線付近は70km）広がる。国土を横切るように、北部にソンコイ（紅河）川、南部にメコン川が流れ、ソンコイ・デルタの中心が北の首都ハノイ、メコン・デルタの中心が南の首都サイゴンである。これらのデルタ地域以外の平野面積は少なく、海岸沿いに帯状に存在するのみである。内陸部は殆どが山岳地帯である。

アンナン山脈の西側にはラオス、カンボジアが位置し、西側国境沿いは険しい山岳地帯であることに加え、熱帯雨林の植生から、補給路や迂回路（ホーチミン・ルート）や聖域が設定された。

図1：ベトナムの地勢

(松岡完, 「ベトナム戦争 誤算と誤解の戦場」, 中公新書, 中央公論社 2001 より引用)

¹ 本章は、次の文献の和訳を基本とし、必要な補足を行っている。

Robert A. Doughty, "The Evolutions of US Army Tactical Doctrine, 1946-1976", Leavenworth Papers No.1, CGSC, August 1979, PP. 29-50

² 理解を容易にするため、これ以降、原文にない節を () 表記で追加した。

³ 松岡完『ベトナム戦争 誤算と誤解の戦場』中公新書 1596, (中央公論新社 2001) 5-6 頁。

ルーズベルトは、終戦に至る過程で、戦後処理原則の一つに民族自決を掲げていたが、1945年4月の彼の死後、大統領に昇格したトルーマンは、戦後のインドシナ連邦の引き続きの堅持の立場を明確にしたド・ゴールに対し、フランスによるインドシナの再植民地化を妨げない旨約束する⁴。他方、9月に独立を宣言した新国家、ベトナム民主共和国のリーダーであるホー・チ・ミンは連合国に対し、新国家の承認の要請を行ったものの無視されてしまう⁵。そして、戦後再びインドシナ復帰を企図したフランスは軍を投入し、1946年初頭までに主要都市をほぼ確保する。その後、ハイフォンでのベトミン軍に対する艦砲による砲撃を警察行動と強弁した仏軍に対するベトミン軍の反撃により第一次インドシナ戦争が開始される⁶。

名称・区分	当事国について	戦争の目的	区分・名称		略称	説明	敵側からの蔑称
			日本語	英語			
北ベトナム側	ベトナム民主共和国 建国 1945年9月 元首 ホー・チ・ミン他 中・ソ連の後ろ立て	祖国統一 民族解放 完全独立	南ベトナム 民族解放戦線	North Vietnam Liberatio n Front	NLF	ベトナム労働党第15決議に基づき、南ベトナムを解放する武力闘争・政治闘争を行うことを1960年12月設立された活動組織。非正規軍	ベトコン Vietnam Communist.ベトナムの共産主義者の意味
			北ベトナム軍	North Vietnam Formally Army	NVA	北ベトナムの正規軍	
南ベトナム側	ベトナム共和国 建国 1955年10月 元首 ゴ・ディ・ジュム他 米国の間接・直接支援	自由のため 全体主義から守る。	南ベトナム (政府) 軍	The Army or Republic of Vietnam	ARVN	南ベトナムの正規軍 米国によるベトナム化の結果(当時)、航空機数は世界第4位、地上戦力は世界第10位となる。	傀儡軍
			軍事援助・ 支援軍	Military Aid Force	MAF	ベトナム戦争に参加した西側の国々(オーストラリア、ニュージーランド、タイ、韓国、フィリピンの五か国)	
参考	ベトミン： 越南独立同盟、インドシナ戦争時、フランスに対する抵抗運動を継続した活動組織。自らベトミン(越南)と呼称(蔑称ではない)。1954年ディエンビエンフーでフランス軍に勝利する。Vietnam Independent Federation						

表1：ベトナム戦争当事国の呼称等について

(三野正洋, 「わかりやすいベトナム戦争」, 光人社 NF 文庫, 潮書房 2008 を参照)

ヨーロッパにおいては、1945年10月のフランス総選挙の結果、共産党が第一党となり、選挙による社会主義政権樹立の可能性が生じた。そのことを忖度したソ連はベトミンに対して医療品を送付したに過ぎず、フランス植民地主義への批難も口先ばかりであった。一方で、左右を問わず、フランス国民の大多数は、対独敗戦の屈辱を晴らし、かつての栄光の時代を取り戻すべく、インドシナ保持を強く望んでいたという実情もあつ

⁴ 松岡 前掲 3) 8頁。

⁵ ヨーロッパにおける冷戦が激化し、同盟国のフランスを犠牲にしてまでベトナムに尽くす義理は米国にはなく、マーシャルプランに基づき、巨額の援助をフランス本国に与え、フランスの植民地戦争を支持する。松岡 前掲 3) 5-6頁。

⁶ 松岡 前掲 3) 7-10頁。

た。やがて、フランスでの共産党の政権獲得の見込みが消えた 1947 年以降、ソ連のベトナム支援が本格化した。

1949 年になり、フランスは、グエン王朝最後の皇帝バオ・ダイを担ぎ、新政府を樹立させ、ベトナム国を建国した。一方、1950 年 1 月、建国間もない中共が、国境の南側の安定を求めるため、ベトナム民主共和国を承認し、ソ連、そして東側諸国がこれに続いた。当時、米国は朝鮮半島から撤退、中国内戦にも不介入の方針を貫くなど、アジアへの関与には消極的であったが、ベトナムへの中ソの肩入れより、ホー・チ・ミンの目的は民族主義的性格ではないと決めつけ、インドシナ介入政策に舵を切った。

朝鮮戦争勃発の 4 日後、米国によるインドシナ軍事援助（助言と支援）の第一波が到着し、8 月には、軍事援助顧問団がサイゴンに発足する。宣戦布告もなく、国内の十分な支持が得られていない戦争に、動員兵を派遣することができない仏軍の将兵の多数は傭兵で、それに米国が援助を与えて戦わせるという構図であった。米国は、経済状態が悪化したフランスに代わり、1954 年の休戦までの間、戦費の三分の一を負担したとされる⁷。

仏軍は、ベトミン軍の補給経路を押さえ得るディエン・ビエン・フーでの決戦に勝負をかけたが、ベトミンの人海戦術による陣地構築と防御戦闘による抵抗、そして、最後は仏軍の空路補給の頼みの綱である唯一の滑走路の使用を阻止され万事休す。その 1 週間後、降伏に至った⁸。この間、米国は原爆の使用も含め、介入を検討したが断念。そして、1954 年 7 月ジュネーブ会議での休戦協定調印を経て、北緯 17 度線を基準にベトナムは南北に分断されることとなる⁹。

（第一次インドシナ戦争後、戦争開始までの状況（米国））

ドワイト・D・アイゼンハワー大統領は、ゴ・ディン・ジェムに軍事援助を約束、1955 年 11 月、彼を南ベトナムの国家元首として承認する。一方、北ベトナムは中ソの後ろ楯の下、1959 年 1 月、ホー・チ・ミン・ルートの建設に着手、1960 年 9 月ベトナム労働党は、ベトナム南部を武力解放することを決断、武力闘争（当初はテロ活動）・政治闘争を開始し、米国の後ろ盾を得た南ベトナムと対峙することになる。米国では 1961 年 1 月、ジョン・F・ケネディ大統領が就任、「柔軟抑止戦略」に基づき、軍事顧問団が拡大改編し、援助軍司令部が設立され支援を継続する。そして、政府内で東南アジア・ドミノ論が主張される中、ベトナムに関しては、「南ベトナム政府に対して経済、軍事援助は行いうが、ベトナム問題は、ベトナム人で解決すべき」という方針を打ち立て、直接介入ではなく対内乱（Counter insurgency: COIN という。）戦略に基

⁷ 松岡 前掲 3) 13 頁。

⁸ 1884 年から約 70 年にわたって続いてきたフランスのインドシナ支配は、悪化した情勢を一举に転換しようと計画した積極策であるディエン・ビエン・フーの戦いが契機となり終焉を迎えた。

三野正洋『わかりやすいベトナム戦争』光人社 NF 文庫（潮書房光人社 2019）45-47 頁。

⁹ 松岡 前掲 3) 16 頁。

づき支援を継続する。派遣された米軍は「南ベトナム政府軍（ARVN）を要請支援するための顧問」の位置づけであった¹⁰。

（戦争の本格化～米軍の撤退）

設立間もない南ベトナム民族解放戦線（NLF）は、1961年、ARVNの前線部隊に対する夜間のゲリラ攻撃を開始する。それに対抗する米軍とARVNは、一般人に紛れ込んだNFL兵士を識別するため戦略村構想¹¹を実行したが、これを妨害するためのNFLによる戦略村に対する攻撃頻度が増加していく。1963年11月のケネディ大統領が暗殺されて以降、ジョンソン大統領は援助の継続を表明するが、トンキン湾事件を契機にして北爆を開始、それまでの方針を変換して、直接の軍事介入に踏み切ることになる¹²。米国の戦闘守則の改正により顧問団が顧問軍に変わり（米国国内法的に交戦が可能となり）、直接的な軍事介入が始まると、文民を含む現地米国人に対するテロが頻発するようになる。1964年7月以降NFLは、「北ベトナム正規軍（NVA）」から最新の兵器が補強されるようになり、戦闘の規模は拡大、形態はテロ活動、ゲリラ戦から正規戦へと次第に変化し、1965年に米陸軍が参戦して以降は、NFLは戦術単位を小部隊から大部隊に変更、そして、NVAが南下を開始し、戦闘が本格化したのである。

米国では、COINはベトナムにおける社会再形成と組み合わせて実施すべきとの主張が多くあったが、米陸軍の最重要関心事は戦術作戦であった。戦闘行動の焦点は、特に米軍の最初の攻撃を開始した1966年の頃から、そして同戦争¹³のVietnamization（ベトナム化政策¹⁴）が始まった1968年にかけてであった。当初は両軍が協同し、米陸軍の部隊が主要な戦闘を戦う一方で、ARVNは鎮圧任務を担当、1968年末以降、ARVNが主軍事作戦の責任を引き受け始め役割を移行、そして、1972年の米軍地上部隊の撤退完了に至った¹⁵。

¹⁰ 小倉貞夫『ドキュメント ヴェトナム戦争全史』（岩波書店 1992）119-120頁。

¹¹ 戦略村構想（ステアラー・テラー計画）とは、住民を本来の住居から離して、そのために設けられた特別の村に住ませ、ゲリラから完全に隔離する構想で、米軍の助言を受け、南ベトナムにより実施された取り組み。三野・前掲注8）70頁。

¹² 小倉・前掲10）132-135頁。

¹³ 東側（北）は「祖国統一、民族解放、完全独立のための戦争」と位置付け、西側（南）は「自由のための、全体主義から守るための戦争」と呼んだ。三野・前掲注8）61頁。

¹⁴ ベトナム化政策：ベトナム戦争においてARVNを強化して自国軍を南ベトナムから撤退させるアメリカの計画。1967年7月グアム・ドクトリンにより明らかにされ、その後相次ぐ撤兵政策が発表された。（ブリタニカ国際大百科事典小項目事典）

¹⁵ 戦後、旧日本陸軍からの統治を回復し、ベトナムの植民地支配継続を企図したベトナム駐留仏軍は、ベトナムの独立宣言を認めず、やがて独立を目指すベトナム人の衝突し、インドシナ戦争（1946年～1954年）に発展する。同戦争は、ベトナム民主共和国をソ連（中国）が、フランス駐留軍を本国と米国が後押しした。ディエンビエンフーにおいて駐留仏軍は敗北し、ジュネーブ休戦協定により、駐留フランス軍は撤退し、非武装地帯を境にベトナムが南北に分割される。インドシナ戦争当時から、仏本国に代わって大量の軍事援助を行ってきた米国は、朝鮮戦争（1950年～1953年）を経て、国内の反共意識が頂点に達していたことも相まって、休戦以降も引き続き、南ベトナム政府に莫大な援助を行った。（なお、本稿は、ベトナム戦争（1961年～1975年）が勃発し、1963年2月に、米統合参謀本部が戦闘守則を改正し、米軍の役割が顧問団（Advisory Group）から、顧問軍（Advisory Force）に変更して以降、1972年に撤退するまでの期間の軍事作戦を焦点としている。）三野 前掲 8）41-56頁。

（（2）大部隊の運用）

（米軍の全体戦略）

戦略的、政治的な考察により、地上戦略は巨大な機動防御であった。戦略は、NVA と民族解放戦線（South Vietnam National Liberation Front、NLF という。）¹⁶部隊を探し出して撃破すること、そして、南ベトナムの人々が自ら、内政に着手できる状態にすることを最終目標とした。機動防御による作戦は、実際は攻撃であり、敵を発見して撃破することであった。このような作戦を積み重ねることにより、理論上南ベトナム政府が、この地域をコントロールすることを可能にした。米陸軍が寄与することの効果は、地方あるいは村レベルにおいて、すぐに確認できるものではなかったが¹⁷、米陸軍による軍事作戦は鎮圧努力の主要な部分であった。

（従来戦との相異の理解）

米海兵隊が南ベトナムに入った 1965 年 3 月¹⁸から、この戦争は不規則で多方面に広がりを見せる性質により特徴付けられた。1965 年 5 月の第 173 空挺旅団¹⁹の到着以降、米国の作戦は、緊要地形や従来目標の獲得よりむしろ、地域内の敵を撃破することに集中した。その結果、戦術的方法は、朝鮮戦争のような制限戦争、通常戦争における要領とは大きく異なることとなった。

このように、ヨーロッパにおける一般的な作戦要領は、南ベトナムでの戦闘作戦にしばしば応用できるものではなかった一方で、1950 年代に米陸軍が着目した（ペントミック・ドクトリンなどの原子戦場を想定した）分散戦場での機動力開発に関し、現地における運用は、順調な進捗を証明した²⁰。

（通信の進化と空中機動力の向上）

1960 年代の初期までに、戦術通信技術が進歩し、ヘリコプターの機動力と連携した時、大部隊の司令官達は、これまで不可能であった数の隷下部隊の統制が可能となった。そして、進化した通信と、指揮統制、米軍の機動力に柔軟性を与え、過去の戦争との類似性がほとんどない、南ベトナムでの戦術作戦における敵の性質を認識させた。

¹⁶ 西側は NFL のことをベトコン（Viet Cong）、VC（Vietnam Communist）、チャーリー（VC の C）などと呼称（蔑称）し、英原文は NFL のことをベトコンと呼称している。三野 前掲 8）62 頁。

¹⁷ 南ベトナム政府軍：the Army of the Republic of Vietnam、ARVN、戦争参加の西側国（オーストラリア、ニュージーランド、タイ、韓国、フィリピン）の派遣軍：Military Aid Force、MAF、南ベトナム民族解放戦線：South Vietnam National Liberation Front、NLF、NVA：North Vietnam Army、NVA 三野 前掲 8）61-63 頁。

¹⁸ 1965 年 3 月 8 日、米海兵隊 2 個大隊、陸軍空輸部隊、ホーク地对空ミサイル部隊など米地上戦闘部隊 3,500 名がダナンに上陸、② 小倉貞夫『ドキュメント ベトナム戦争全史』（岩波書店、1992）146 頁。

¹⁹ ウェストモーランド将軍指揮で Fire Brigade と呼ばれた。1967 年 11 月、中央高原（ダクトー県）において第 173 空挺旅団（旅団長：ウェストモーランド将軍）が実施した作戦要領は「火の旅団」と呼ばれた（後述）。Army（1994）P.69

²⁰ 菅野隆「MDO に至った経緯（第 3 回冷戦黎明期）」修観 2020.10 月号（修観刊行事務局 2020）61-65 頁。

(従来戦とは異なる戦闘)

南ベトナムでの戦闘においては、過去の経験とは異なるいくつかの例外があった。戦闘の意図や規模の変化によっても、従来戦の多くの要素を含むこともあった。1970年4月から6月にかけてのカンボジア侵攻²¹、ARVNによるラオスにおける1971年2月から4月の作戦²²、1972年3月から4月²³、そして1975年の3月から4月にかけてのNVAの攻撃²⁴などは従来戦の例である。しかし、(その他の)多くの戦闘は、従来戦とは異なるものであった。米軍司令官達のジレンマは、比較的小規模な作戦で支配した環境であっても、大規模作戦の脅威が継続したことであった。

(期待通りに得られぬ戦果)

米軍が1965年の戦闘に参加した頃、NFL及びNVAは、その作戦要領を小部隊による戦術から、大部隊作戦へと変更した時期であった。彼らは、勝利の十分な度合いを楽しんでいた。当時の状況について、ウィリアム・C・ウエストモアランド将軍²⁵は「南ベトナム政府は、すでに10年以上にわたる戦闘に疲弊しており、敗れる段階に直面している」と述べている。そして、米陸軍の最初の戦いの段階において次のように述べた。「敵の主動を挫き、我々の部隊の展開を防護し、人の居る地域の安全の範囲をできるだけ拡大する」

1965年を通じ、第173空挺旅団による「火の旅団 (fire brigade)」アプローチが繰り返された。そして、1966年初期に至っては、陸上戦力が十分効果的なレベルになるまでの間、航空そして砲兵の火力による攻撃が積み重ねられた。戦争初期の段階の間、地上作戦は、直接かつ重大な脅威となる敵に対してのみ、徹底的に実施された。これらの取り組みにもかかわらず、1966年の春を目指した迅速な勝利の望みが失われた。リチャード・G・スティルウェル少将は、この時の状況について、「主動性は、味方を通り過ぎはじめ

²¹ ベトナム南部と国境を接するカンボジア東部は、NLFの聖域となっており、NLFのゲリラは、ARVNに追われると、国境を越えてカンボジアに逃げ込む、南ベトナム側は正規軍であり、国境を越えられない不合理が生じていた。3月27日以降、米軍とARVNがついに国境を越え、カンボジア国内の聖域に大兵力をもって侵攻し、NLFに大損害を与え、軍事作戦としては成功裏に終わる。

三野 前掲 8) 124-126 頁。

²² カンボジア侵攻のほぼ1年後の2月8日、南政府軍と米軍はラオス領内の共産側拠点を攻撃するための大作戦「ラムソン719」を実施する。ラムソン719はARVNと米軍の共同の作戦としては実質的に最後のもので、ベトナム戦争史上最も大きな作戦規模となった。戦死者数では、NLF、NVAが上回り、作戦は成功と発表されたが、実際は対空攻撃による多数のヘリコプターの損失と、厳しい反撃により、南政府軍、米軍側は全軍を退却させた。

三野 前掲 8) 129-132 頁。

²³ 重装備の北ベトナム正規軍の大兵力がMDZを越えた南侵による攻勢。復活祭攻勢 (Easter Offensive) と呼ばれる。南・米側は奇襲を受け被害が大であった。

三野 前掲 8) 135-136 頁。

²⁴ 共産側の春季攻勢により、逐次主要都市が陥落。南政府と軍は首都サイゴンを中心に戦力密度を高めることを企図し、DMZ付近の部隊に南部への移動を指示したが、撤退と誤伝達され大きな戦闘がなく海岸沿い主要都市は次々に北の支配下に落ちる。チュウ大統領は米国に軍事的支援を要請したが拒否され、4月17日首都陥落に至る。

三野 前掲 8) 154-156 頁。

²⁵ William Childs Westmoreland, 第二次世界大戦、朝鮮戦争と華麗な戦歴を誇る米陸軍の将軍であり、1964年から1968年まで南ベトナム駐留米軍の司令官。1969年から陸軍参謀総長に就任するも体調を崩し1972年に退役。ヘリを大量に運用して行う「サーチ・アンド・デストロイ」戦術を導入し、1960年代末期に大きな戦果を挙げる。

三野 前掲 8) 314 頁。

た」と表現している。

1965年10月から11月にかけてのドラングバレーの戦いから、1967年2月から3月のジャンクションシティの戦い²⁶にかけて、米陸軍の司令官達は、より大規模なNFL、NVAを撃破するため、師団或いは複数師団規模の部隊を運用した。師団又はそれ以上のサイズの部隊は、1967年以降、1968年初期のケサン周辺や、1968年1月のテト攻勢の後の戦闘に使用された。

大部隊を敵基地地域に投入したものの、攻撃や偵察をしばしば失敗した。半従来型作戦の焦点では、大部隊作戦は局地的安定化努力においてコストがかかった。しかし、陸軍レベルの視点では、このようなことは、現地の環境から来る特性であることを認識していた。ウェストモーランド将軍は、「我々は学んだ・・・鎮圧が既に成功していたとしても、その後、速やかに敵と戦わなければならない」と述べている。我が局地警戒部隊を攻撃する敵主力部隊の脅威を取り除く必要があった。

米国が関与した最初の段階においては大部隊作戦が中心であった。そして、旅団、大隊、中隊による（小さな）戦術作戦は、戦争を通じた努力の多くを占めた。敵を発見する可能性を増加させるため、広い地域をコントロールし、部隊を広域に分散させた。（敵）小部隊に対する攻撃的で有能なリーダーシップ（指揮官）が、全ての戦術作戦における基本であった。

師団以下の作戦は、安定化の取り組みと敵を発見するための鍵であった。ジャングルにおける作戦では、小部隊の戦術が基本であった。濃い植生、そして破壊された地形は、敵に理想的な隠・掩蔽を提供した。指揮官が敵を発見したいと思えば、隷下部隊を分割、分散させなければならず、敵と接触した際の迅速な増強が困難になるといったジレンマがあった。このため、小部隊作戦には機械化歩兵部隊が必要であった。ある大隊指揮官経験者は、次のように述べている。「ベトナムでの戦争において、彼は計画者であり、実行者であり、独立したオペレーターであり、兵士達のリーダーであり、成功のための鍵であった」

ベトナムにおける米国の地上戦の役割が終わってから、2人の将軍は次のように記している。彼らは、最初、最良の戦闘結果は、小さな戦闘結果ではなく、むしろ、より大きな戦闘結果から得られるものであった。小部隊の作戦はより多くの敵犠牲者を生起させ、損

²⁶ 1968年頃まで、米陸軍とARVNの協同の形態で行った中で最大の戦闘。南ベトナム領土内で行われた自由主義陣営側からの最大の攻撃行動。結果としてはNAV側に僅かな損害しか与えられなかったとされる。三野 前掲 8) 191-193頁。

耗のほとんどは、小さな接触に起因ものであることを認識していた。作戦は、小部隊の作戦に対し防護を提供することに加え、敵の大規模な集中を阻止するために必要であった。

(ヘリコプターの活躍)

米国が参加した最初の段階において、ヘリコプターは、ベトナム戦争における最も重要な革新の1つとして出現した(図2)。その機動性、輸送能力は、南東アジアの多様な錯雑地形における敵軽歩兵に対応するための作戦で、重要な機能を提供した。補給品、弾薬、装備、そして負傷者の輸送手段として支援機能として汎用性の高いものであった。また、広範囲のパトロールでの運用から、師団全体の空中機動攻撃まで、幅広い戦術任務を担った。



図2：ヘリコプターの運用の様子（Jitterbug 戦術の一コマ）

(LG Julian J. Ewell, MG Ira A. Hunt Jr, “Sharpening the Combat Edge: The use of analysis to reinforce military judgement”, Department of the Army (1995) P.108)

ヘリコプターの運用は、それまでの戦術的方法に基本的に影響を及ぼし、人と装備をまとめることを可能にした。部隊を戦場に輸送し、戦闘間、機動、増強、陣地変換、そして離脱することを可能し、迅速に集中することができた。歩兵編成と戦術の開発は、空中機

動コンセプトと、それを活用した戦術の効果的な応用を増加させた²⁷。

((3) 作戦レベルの行動)

(3 種類の米陸軍の作戦と教訓)

米軍の部隊がこの戦争に入ることに先立ち、米陸軍は作戦の 3 つの基本的な種類を表現する用語を開発した。これらの専門用語は、ベトナム戦争と、それ以外の米国が参戦した戦争の間の違いを明確にしていた。

(サーチ・アンド・デストロイ)

「サーチ・アンド・デストロイ (索敵撃滅、**search and destroy**)」の目的は、相手の主力軍を撃滅して、戦場の主導権を握り、戦争の推移を変換させることであった²⁸。規範上は、複数大隊作戦とするも、実際には、中隊から複数師団レベルで実行された²⁹。この作戦の中で「蹄鉄 (**horseshoe**)」の語を使用するが、これは、阻止陣地を蹄鉄状に配置し、地上の戦闘力を「蹄鉄」の中心に向けてコントロールするといったものである。また、「鉄槌と鉄床 (**hammer and anvil**)」作戦は、大きく 2 つの部隊を使用する戦術であり、1 つは敵を拘束するための防御陣地を、もう 1 つは拘束された敵を包囲して撃破するために運用する。さらに、直接的な攻撃においても使用され、地上部隊は敵の基地地域に接触を求め、敵が逃げる前に、彼らに重い損耗を強いた (図 3)。

1968 年 4 月^{30 31}、米陸軍は (これまで戦術用語でなかった) 「サーチ・アンド・デストロイ」という用語を公表した。ウエストモーランド将軍は、「(我々は、) ジャングルの中での目的のない捜索や、財産の破壊など (必要のない破壊行為や不法行為は行なわないという) アメリカの一般の人々の思いと同じである」と述べ、悪化しつつある世論をかわすことを忘れなかった³²。そして、戦闘掃討、威力偵察、攻撃阻止 (**spoiling attack**) などの (おなじみの) 戦術用語は、(軍の印象を改善するため、それまで使用されてきた軍事

²⁷ 軍隊の移動にヘリコプターを用いるという戦闘形態は非常に合理的で、南ベトナムの上空は手を叩くような爆音に満たされた。このため、ベトナム戦争は別名 “ヘリコプターの戦争” と呼ばれた。ベトナムに配置されたヘリコプターの数はこの年 (1965 年) から順次増加し、2 年後には 3600 機に達した。

²⁸ 小倉・前掲 10) 151 頁。

²⁹ サーチ・アンド・デストロイ作戦は、作戦実行命令がでると、敵を発見し、これを捕捉して敵が動けないようにした上で、郵政な火力で戦闘能力を奪い、撃滅するといった段階を踏む。小倉・前掲 10) 153 頁。

³⁰ この年の前半にベトナム戦争の行方は決定したとも言える。旧正月 (テト) にあたる 1 月 31 日早朝、NLF と北ベトナム正規軍が 6 万人を動員して全土で大攻勢を展開した。「戦術的には」大きな失敗との評価がある一方で、その映像の報道を通じてアメリカ国民が、情勢有利を語ってきた自国政府に不信感を持たせ、「もはや戦争に勝てない」と思わせたと言われる。そして、ソンミ村虐殺、NFL 容疑者の南高官による射殺報道が米国の反戦運動を一気に盛り上げる契機となった。三野 前掲 8) 107-113 頁。

³¹ テト攻勢とケサン攻防戦の後の 3 月 31 日、ジョンソン大統領は演説を行い、米国がベトナムから手を引くことを示唆した。三野 前掲 8) 113 頁。

³² ベトナム戦争中、米国政府は軍とごく一部の特殊な例を除いて、マスコミに最大限の便宜を図り続けた。(中略) それまであまり知られていなかった戦争の悲惨さ、非情さをそのままの形で米国の過程に届けることになった。これに加えて、女性、子供、老人の映像が写し出されれば、自国の軍隊や兵士に対して憎悪とは言わないまでも不信感が増していく。(中略) そのことが場合によっては、確実に同法の死傷、米国の信頼喪失につながった。

三野 前掲 8) 130-135 頁。

用語ではない)「サーチ・アンド・デストロイ」の語に置き換えられた。しかしながら、(このような努力を払う一方で、) 作戦の説明にあたり、(不注意にも) 従来の用語(戦闘掃討、威力偵察、攻撃阻止など)をそのまま使用してしまうケースがあった。

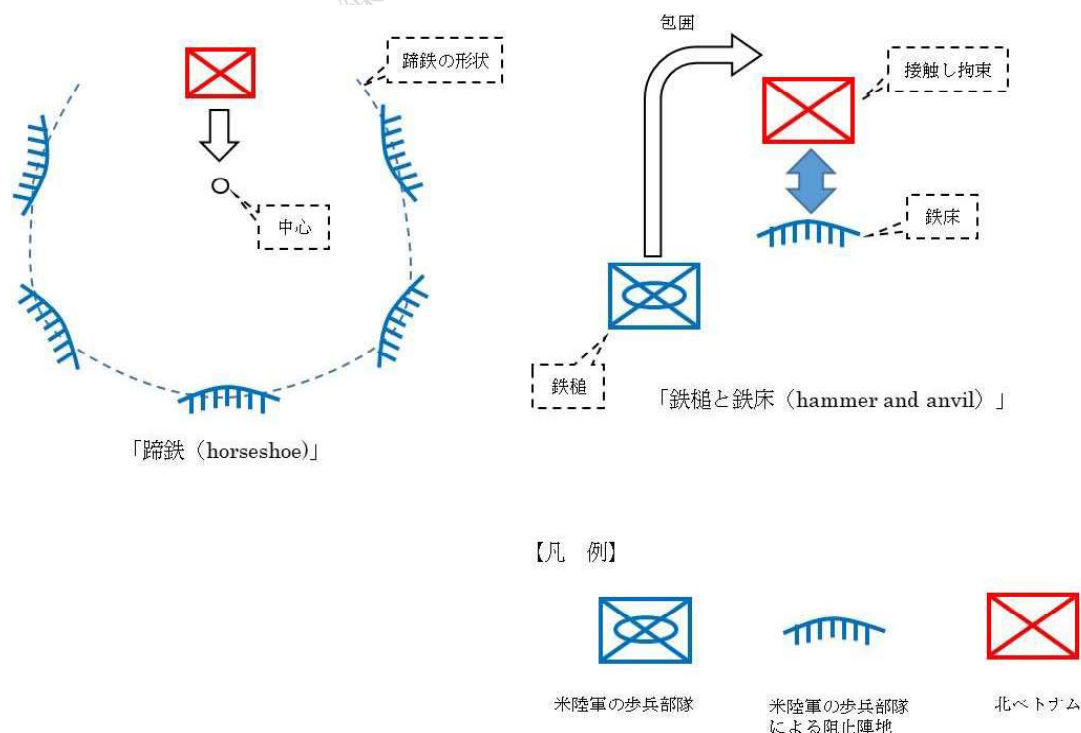


図 3：サーチ・アンド・デストロイ作戦における基本的戦術行動

「クリーニング (cleaning)」³³作戦は、サーチ・アンド・デストロイ作戦に似ているが、それらは撃滅ではなく、鎮圧 (pacification) により大きな重点を置く場合であった。サーチ・アンド・デストロイ作戦は、あるエリアから敵を追跡し、撃滅する。クリーニング作戦にあたっては、南政府軍に、そのエリアに対する影響力を獲得する素地を作るため、駆逐することを優先した。

同時に、威力偵察 (reconnaissance in force)、戦闘掃討 (Combat sweeps)、他の攻撃作戦は継続された。クリーニング作戦において最も強調すべき点は、敵の局地的あるいは主力の抵抗と、彼らの支援基地を、排除することである。局地的な地域を担当する指揮官と政治指導者は、例えば、村やエリアを綺麗にする (clear) ために、しばしば「非常線一搜索 (cordon-and-search)」作戦を使用した。このようにして、クリーニング作戦は、「サーチ・アンド・デストロイ」作戦より長い間継続された³⁴。

³³ 後出の戦闘掃討 (Combat sweep) は戦術レベル、クリーニング (Cleaning) は作戦レベルに整理可能

³⁴ 「非常線一搜索」作戦は、地域を封鎖し、武器や反乱者を求めて建物内を搜索するための戦術。対反乱作戦の基本的な行動の1つ。2種類のコードンと搜索要領は、コードンとノック、コードンとキックである。コードン：非常線

最後の種類は、「安全化 (securing)」作戦である。この作戦は、鎮圧が達成した状態を維持することを目的としている。そのため、局地的なゲリラ部隊や、敵の重要なインフラ、支援基地の排除に集中する。一般的には複数の大隊の攻撃掃討が、地域の安全化のために使用されるが、安全化は規範上飽和した巡察であり、集落の非常線搜索であった。これらの取組は、徹底的な尋問と民衆の特定を重視するため、南ベトナム警察の支援を受けた。彼らは、医療支援のような市民運動の取り組みのような意志と根気強さを持っていた。かかる取り組みは、南ベトナム政府の合意と、米国を含む西側の部隊により行われ、市民を守り、その地域の治安を維持した。

論理的に、作戦の正しい順序は、サーチ・アンド・デストロイ、クリーニング、そして安全化であり、最終段階である安全化の先は、南ベトナム地域の、南ベトナム政府軍そして警察による統治を目標としていた。索敵撃破作戦は、すなわち敵主力、そして地域大隊との交戦であった。残った小さな部隊は、クリーニングと安全化の作戦により根絶やしにされた。

以上提示した作戦の種類は理想的なモデルは、目的に応じ、現実の作戦に適用された。これらの任務モデルは、理想的な状態を前提としていたため、南ベトナムの地形、気象、そして敵の幅広い多様性に影響され、成功よりも失敗することが多かった。常に改善することが必要であること、そして現地の多様性に、柔軟に適応することが当たり前の現実であり、ベトナムの非従来の環境により様々な常識が覆された。

地上における戦術作戦の目標は、敵部隊の撃滅であった。敵を「発見し、捕捉し、戦い、そして終えること」は、ベトナム戦争の間、多く繰り返されたスローガン（標語）であった。「敵部隊の撃滅」というゴールを達成することは、それに至るサーチ・アンド・デストロイ、クリーニングと安全化の手順よりも、より重要であった。この考え方が基礎にある理由は、敵の本質にあった。つまり、敵の機動性と予測不可能性は、米陸軍の部隊に、敵の影響から解放されたと判断した地域において、再びサーチ・アンド・デストロイや大きな戦闘を強いることがあった。

米陸軍の作戦の基本的行動（作戦レベル）を表 2 に示す。

順序	作戦名称	目的	運用規模	対象	要領	
					説明	実現するための戦術行動の従来名称
1	Search and destroy	敵主力軍を撃滅して、戦場の主導権を獲得し、戦争の推移を変換させること	大隊を基本 (複数師団～中隊レベル)	敵主力軍 地域大隊		Combat sweeps (戦闘掃討) Reconnaissance in force (威力偵察) (攻撃阻止)
2	Cleaning	鎮圧に重点を置き、南ベトナム政府に地域に対する影響力を獲得させる素地を作ること	中隊以下を基本 (～複数大隊)	敵主力軍あるいは 局地的抵抗 (残存した小部隊) と支援基地の排除	Search and destroyに似た要領	非常線搜索
3	Securing	鎮圧した状態を維持すること		局地的なゲリラ部隊 (残存した小部隊)、敵の重要インフラ、支援基地	集落の非常線搜索 (徹底した尋問と民衆の特定を重視)	

↓

↓

↘

目標： 南地域の南政府軍、警察による統治

表 2：ベトナム戦争時の米陸軍の基本的行動（作戦レベル）
(本文記述を整理)

((4) 認識した北ベトナム武装組織の特性)

(敵の性質)

米国の地上軍が南ベトナムで実施した戦術は、敵の編成と戦術の影響を強く受けた。敵の部隊は、基本的 3つのグループから構成された。①局地的又は地域のベトコンゲリラ、②ベトコン主力部隊、そして③北正規軍によるものであった³⁵。

局地的なベトコンゲリラは、通常、パートタイム兵士であり、昼間は、市民生活に混在した。そして、夜になると強力な戦士となった。彼らは、小部隊で作戦した。(通常は、分隊、小隊、あるいは中隊) ベトコン主力部隊は、地域の村から採用されていた。彼らは、生まれた地域において運用された。

北ベトナム正規軍の部隊は、大隊、そして連隊として組織化されていた。しかし、南ベトナムでの作戦においては、師団編成されることもあった。彼らは、ベトコンよりも、十分な装備を持ち、よく訓練され、大規模な作戦の能力を十分持っていた。分隊や小隊まで

³⁵ 米国は南ベトナム民族解放戦線を「ベトコン」、つまりベトナム人共産主義者を意味する蔑称で呼び、北ベトナムの道具であると非難した。

松岡完『ベトナム症候群 超大国を苛む「勝利」への脅迫観念』中公新書 1706 (中央公論社 2003) 66 頁。

ブレイクダウンすることも可能であり、この場合、局地的なベトコンと同じ要領で運用することもできた。

ベトコン主力部隊は、局地地形に関する知識、ゲリラ戦を通じた卓越した戦闘経験、そして、意欲的な献身の姿勢など、戦争を通じて手強い敵であった。ある米軍将校はベトコンを「幻想的に献身的な敵であり、戦車に乗り、必要であれば、槍と弓のみで戦った」と述べている。

NVA は、ベトコン部隊より良く装備され、通常大隊、連隊、あるいは師団で戦った。重砲兵、戦車などの運用によりそれは明らかであり、戦争の後半段階において特に際立った。火力が不足し、大部隊でない場合は、その作戦方法は、ベトコン主力と似ていた。

NVA は、ローカルなベトコンと同様に、軽、そして高い機動力によるゲリラ作戦も遂行する能力もあったが、そのような作戦は、しばしばうまくいかなかった。南北の関係性の欠如により、NVA は、外国人としての特定が容易であったため、地域住民の中に、上手く入り込めなかったのである。米軍部隊による大規模な攻勢作戦は、1967 年の中頃まで、彼らのキャンプや南ベトナムの大きな市街地近くの聖域から敵の大部隊にわたって、継続した。NVA の部隊は、しばしば国境地域で作戦を行った。国境は（カンボジア、ラオスなどの）安全な地域（聖域）に繋がり、米軍部隊から逃れることが容易であった。

敵は、様々な種類の部隊ではあったが、相互に依存して作戦した。そして、それぞれの種類の部隊が、他の部隊の方法や任務に関係なく、それぞれの方法で戦闘を行った。例えば、ベトコンの地域部隊は、我が友軍に対するいやがらせ (harassment) を継続しつつ、ベトコン主力部隊に対する兵たん支援を実施した。同時に、主力はより大きな作戦において、激しい戦いに耐えた。

ベトコンと NVA は歩兵戦術を基本とした。そのため、機動力が作戦の鍵であった。不利な状況での戦闘は回避し、有利な環境下でのみ、決定的な接触を受け入れた。彼らの作戦は「敵が前進した時は離脱、敵が防御した時はいやがらせ、敵が疲れた時は攻撃、敵が離脱するときは追撃」といった要領であった。予想しない展開では、敵は接触を中止し、より好ましい状況の到来を根気強く待った。ただし、1968 年のテト攻勢³⁶は例外であり、大量の負傷者を受け入れ、強固な意思を示した。また、1972 年 3 月から 4 月にかけての攻勢³⁷後の強力な防御においても独立のために戦う強い意思を示した。

³⁶ 1968 年 1 月 31 日から開始された北ベトナム側の大攻撃を「テト攻勢」という。名称は、時期が旧正月（テト）にあたったことに由来。楽観視が占めていた米軍首脳部の雰囲気をも根本から覆し、米国民も真実を知り始め、戦争の将来に決定的な役割を果たした戦いとの評価もある。三野 前掲 8) 193-194 頁。

³⁷ 同攻勢は復活祭攻勢 (Easter Offensive) と呼ばれ、それまでの南進とは異なり、重装備の NVA を主力とするものであった。同校正を受け、ニクソン大統領は和解交渉のために休止していた北爆 (ラインバックー I 作戦) を再開する。三野 前掲 8) 135 頁。

敵の戦術は、自らの火力不足を認識したものであった。軽歩兵部隊は火力が不足したが、友軍の火力支援を受け、交戦の数分という至短時間において、小銃と自動火器によって戦うことを追求した。そして、待ち伏せを多用し、実際効果的であった。米陸軍は、ジャングルであれ、道路上であれ、作戦に先立つ偵察抜きでは、安全を確保することはできなかった。

敵の待ち伏せ攻撃の技術に関しては、例えば、誘致と伏撃は、注意深く準備した罠に、追撃する我の兵士を誘致導入した。その他にも、我が装備や部隊に対して、しばしば鋭く激しい攻撃を与えた。我が掩護部隊が脅威を受けた部隊の陣地に、支援あるいは救援に前進した際に、そこで、自らが獲物になったことに気付く場面もあった。加えて、狙撃火力、ブービートラップ、地雷、そして迫撃砲の連続射撃など、ベトコンはいやがらせの達人であった。

敵は、我の弱点に対する迅速な攻撃に着意した。典型的な一例として、1975年の3月10日から11日のバンメフアウトの攻撃がある。NVA 参謀長のバン・ティエン・ダン將軍の部隊は、市の周囲の外側の防御地域を放棄して出撃し、南ベトナム内部の町にある指揮統制センターを攻撃した。指揮統制センターの確保後、NVA 部隊は、その地域の外側を確保した。そして、バンメフアウトをわずか32時間で占領したのである。

NVA とベトコンの部隊は、時に重砲による支援下に、大規模な突撃も使用した。注意深く選定した目標に対する迅速で激しい突撃は、ベトコンと NVA をして歩兵の戦闘力を最大化させ、防御側に多くの損害を強いた。このような攻撃は、短時間で計画され、細心の注意をもって準備され、繰り返し予行されていた。このような要領で、敵は負傷者を与えては離脱した。敵の貧弱な通信能力は、(我にとって) 幸いにも、しばしば硬直した作戦を採用させることがあった。

ベトコンと NVA の部隊は、他の様々な要領で、米側の火力の効果を弱めた。それらの中でもっとも効果的であったのは夜間戦闘であった。暗闇による隠蔽下の彼らの作戦能力は、しばしば、米軍の強点である火力を無力化した。

ベトコンと NVA は、防勢を強いられ、あるいは、一定期間機動できないような場合に対応できるよう、友軍火力により防護機能の提供を受けられるよう塹壕、掩蔽壕、トンネルによる複雑なネットワークを構成した。また、至近距離での交戦を追求することは、我が使用する砲兵や航空攻撃、ヘリコプターの火力支援を制限することが可能で、実際効果的であった。そして、奇襲や機動の活用は、我が火力の集中前に、攻撃して離脱することを可能にした。

ベトコンと NVA 部隊は、装甲化されておらず、熟知した地形と環境下の戦闘であっても、多大な人的損害を被った。十分に訓練され、士気旺盛な兵士たちから構成された敵も、私の優勢な火力制圧下損耗を重ね、やがて、部隊の質は徐々に低下した。しかしながら、多くの損耗を受け入れる敵の強い意志と、予告のない攻撃の能力は低下することはなく、依然として米陸軍部隊に対し、全ての機動と行動を、戦闘行動とすること強要し、脅威であり続けた。

米軍が認識していた北ベトナム武装組織の特性を表 3 に整理する。

作 戦	構 成	規 模	活動地域	特性・能力	戦い方	装 備	訓 練
局地的又は地域のベトコンゲリラ	パートタイム兵士	小部隊での行動（中隊以下）	当該地域	<ul style="list-style-type: none"> ○地域の熟知 ○ゲリラ戦の経験豊富 ○意欲的な献身の姿勢 ○嫌がらせの多用（待ち伏せ、狙撃、ブービートラップ、地雷、迫撃砲の連続射撃） 	<ul style="list-style-type: none"> ○歩兵戦術（機動の発揮） ○奇襲・夜間攻撃 ○至近距離での交戦の追求 ○塹壕、掩蔽壕、トンネルによるネットワーク構成 ●貧弱な通信 ●装甲化されていない。 		
ベトコン主力部隊（南ベトナム民族解放戦線）	地域の村（パートタイム兵士）から採用						
北ベトナム軍	正規兵	師団編成以下		<ul style="list-style-type: none"> ○国境付近での作戦 ○大規模な作戦の能力 ○ゲリラ戦能力 ●外国人としての特定が容易で南地域に溶け込めず 		○	○

表 3：米軍が認識していた北ベトナム武装組織の特性
(本文記述を整理)

(5) 戦術レベルの行動

(情報の重視)

身軽で、高い機動力、予測のできない特性は、我に、出現した全てを、最も重要な敵と思わせ、全ての作戦において、フラストレーションの一部となった。当時の旅団長は「敵を発見することのできない旅団は、作戦を成功することはできない」と述べている。この見解は、あらゆる規模の部隊にも言えた。そのため、非戦闘の状況下においても、犯罪者に対する尋問、鹵獲した文書の搾取などの伝統的な手法を含む情報の活用など、我は情報を特別に重視した。パターン活動分析のような洗練された手法もとられた。この場合、長い時間にわたって、敵の活動のパターンを記録することなども含んだ。とらえどころのない敵を特定するため、外国産の技術デバイス、人探知機、地上レーダー、空挺レーダー、アクティブおよびパッシブ視覚デバイスなど、様々なセンサーと写真技術を組み合わせた画像解釈技術、赤外線、そして、電子装置なども運用した。

それらの効果に関し、W・O・キナード少将は、戦術情報を収集するための装置の仕組みと収集範囲を考えた場合、敵を見つけるための我々の能力は「我々の戦場の機動と火力に適合するものではなかった」と述べている。しかしながら、(効果がなかった訳ではなく、) これらの情報収集の取組を通じ、早期に情報を獲得した場合、敵部隊又はベースキャンプの位置を正しく特定することができた。

(チェッカーボード)

敵を発見する機会を増加させるため、多くの準ゲリラ戦術が地上部隊により実行された。「チェッカーボード (checker board)」戦術³⁸は、小隊から分隊規模の小部隊の担当地域で、四角く囲むことにより地域を搜索する方法である。作戦の地域は、チェッカーボードの(碁盤の)正方形の枠の中で、現実の部隊は全体の地域を飽和するために継続的に行動し(特に夜間)、全ての敵の動きを排除していく。

(ブッシュマスター)

「ブッシュマスター (bushmaster)」戦術は、敵の連絡経路を探して差し止める。連絡経路は、普通、組織化された敵が展開する地域に設定されるので、そこで使用する我が部隊(小隊以上を基本)は、ブロック、防御、そして待ち伏せる定められた地域内の陣地を占領する。隣接する我が部隊は、相互に増強できる様、近傍に位置するのである。ブッシュマスター戦術は、主に、夜間の作戦であるが、昼間にも使用された。

³⁸ チェッカーボードの語については、他文献に次のような記述がある。「タスクフォースが運用された18日間、通常のドーザー6両と装甲ドーザー2両のチームは、それらの中には大型のブレード (with Roma plow blade) を装備したのもあったが、歩兵部隊に同行し、2233 エイカーを伐採整地した。そして、将来作戦のための着陸地域として区画 (checkerboard) した。」

MG Robert R. Ploger, "Vietnam Studies: U.S. Army Engineers, 1965-1970", Department of the Army (1974) P. 140

(飽和巡察)

他の戦術は、「飽和巡察 (saturation patrolling)」である。巡察により地域がクローバーの葉っぱ状 (放射状) に検索され、詳細な搜索が実施可能であり、敵の活動は圧縮され、小さく縮小した。広範囲の巡察は、敵の支配下の地域に深く浸透するために、特に価値があった。

(後方での待機)

「後方での待機 (stay-behind)」部隊も使用された。敵部隊の主力が作戦に出発したとき、我が小部隊は隠蔽して、その地域に潜伏する。そして、敵が戻ってきた時、我が待ち伏せ、あるいは砲兵によって撃破するといった運用であった。

(ジッターバグ (ヘリコプターの運用))

ヘリコプターの使用は、敵を発見するため極めて有効であった。航空攻撃において、敵の存在の疑わしい地域を連続的に攻撃することで、敵が存在し得る複数の地域を確認することができた。「ジッターバグ (Jitterbug、ジルバ)」はこの種類の 1 つであり、小さい攻撃部隊を、多くの敵がいる可能性のある地域に派遣することを重視した。敵は、このジルバを、目標に対し急襲するワシのようである (hawk tactics) と、適切に説明していた³⁹。

ヘリコプターは、広いエリアを偵察するための手段を提供する。おとりのヘリコプターは、敵火力を引き付けるために使用し得た。そして、「Eagle flights」⁴⁰は、約 1 個ヘリボン歩兵小隊から構成されるが、そのための状況を作為する。ヘリコプターの機動力は、指揮官に対し、彼らの本来 (ヘリコプターなし) の行動地域より、より広い範囲の地域に影響力を広げることが可能にした。

(機械化部隊の運用)

機械化部隊も、敵を発見するための更なる能力を提供した。敵が我に (発見される、待ち伏せされるなど) 弱点を呈することを強いるため、機械化部隊は継続的に機動し、敵に動き続けることを強制した。機械化部隊の大火力と迅速に反応できる能力により、歩兵大隊の約 2 倍の地域を支配することが可能となった。

³⁹ 敵の掩蔽壕は、複雑ではなく、デルタにおいて運河とその傍に存在する水田に長軸に接続していた。かかる地域で迅速に偵察し、敵大隊あるいは中隊を空中包囲するため、現地の状況、電子及び化学センサー、空中騎兵及び空中歩兵の機能の連携が必要であり、このプロセスが初心者には複雑で「熱狂的」に見えたことから「ジッターバグ (ジルバ)」という名称がつけられた。LG Julian J. Ewell, MG Ira A. Hunt Jr, “Sharpening the Combat Edge: The use of analysis to reinforce military judgement”, Department of the Army (1995)

⁴⁰ Eagle flight は、小規模であるが自己完結で十分に訓練されたヘリボン部隊を運用する作戦を指す。“Lessons Learned No. 32, Eagle flight Operations”, US Army Military Advisory Group Vietnam (1963)

戦車や APC による迅速で広範囲の掃討の能力は、指揮官が、広い範囲で敵を捜索することを可能にする。このような装甲車による作戦は、山地地形では困難であるが、ジャングリーブッシング (jungle bushing) には向いていた。指揮官は、整備の問題とサスペンションに対するダメージが、得られる利得に対してより小さいものとなるよう、(機動路などを) あらかじめ検討する必要があった。戦車は「雷鳴 (thunder runs)」作戦にも使用された。これらの作戦においては、戦車の小グループは、しばしば夜間、確実に存在する敵部隊、あるいは重要な連絡道から敵を排除するために、高速で走行させるものであった。

(その他の要領)

敵を発見するための他の要領としては、彼らを隠れたキャンプから誘き出す必要があった。餌 (bait) を提供することにより、彼が発見され得る場所に誘致するのである。例えば囷となる餌である火力支援基盤、あるいは特殊部隊のキャンプを、敵が攻撃し易い場所に展開する、あるいは、車両縦隊が移動して弱点を見せつけるなど、我がひどい損耗に苦しむことなく、敵を騙し、死傷者を与えられるように考察することが求められた。

(Pile on 戦術)

敵との接触が確立されたならば、増援された米陸軍の機動部隊は、敵の陣地を取り囲む。これらは、pile on 戦術と呼ばれる最初のステップである。全ての機動は、通常接触の前、または、追加の編成装備の pile on の間、に行われる。接触していない全ての部隊は、予備部隊としての運用を予期して準備する。ジョージ・S・パットン大佐は、部隊が接触した後、文字通り最初の包囲のために、全ての方向から部隊を同時に投入、圧縮し、敵を撃破する。この際、ヘリコプターと機械化部隊の卓越した機動力を駆使、周辺の待ち伏せ陣地を確保した上で、足が早い敵部隊を撃破する。部隊と地域の規模に応じて、このような包囲の方法は「ねずみの穴 (rat hole)」あるいは「牛の目 (bull's eye)」戦術と呼ばれた。

攻撃は、機動部隊による地上攻撃というよりも、まず火力により実行された。歩兵の攻撃は、敵が我が支援火力により事実上撃破される段階まで留保した。敵の間にある高密度の自動火器は、我が火力で暴露した際に、さらに損耗した。地上軍の機能 (特に歩兵) は、敵を発見、修正して (機動と火力により) 地域を制圧することであるが、戦闘を終わらせることは、しばしば大量の砲兵と航空火力により達成された。

米軍の強点である圧倒的火力の最大限活用による戦法は、我が死傷者を最小化した。作戦にあたっては、命を守り、弾薬は節約しないという考え方に沿った。大事なことは、敵を発見することであり、それが出来たら、小火器や支援部隊によりその位置を修正して、部隊で包囲した上で、圧倒的な火力あるいは航空火力により撃破するのである。この pile

on 戦術は、米陸軍の火力により敵を殲滅させる新たな戦法であった。

米陸軍の現地における基本的行動（戦術レベル）を、表4に整理する。

名称	説明	備考
Horse shoe	阻止陣地を蹄鉄状に配置し、地上の戦闘力（火力）を蹄鉄の中心に向けてコントロールする戦い方	複数の阻止陣地を「蹄鉄」状に配置することに由来
Hammer and anvil	2個の部隊を運用する戦術であり、防御陣地により敵を拘束しつつ、他の部隊で拘束された敵部隊を包囲して撃破する要領	敵を拘束する防御陣地・部隊を「鉄床」、包囲部隊を「鉄槌」に見立てた名称
Checker board	地域を細かく正方形に分割し、その四角に囲まれた地域を分隊又は小隊の担任区域とする搜索の手法	ボードゲームである「チェッカー」の盤に由来した名称
Bushmaster	敵の連絡経路をブロックし、適地を陣地占領して待ち伏せる戦法。隣接部隊が相互支援できるように留意。夜間実施することを基本	毒蛇「ブッシュマスター」の名称に由来
Saturation patrolling	放射状に巡察し、敵の活動を圧迫、活動地域を縮小させる手法	飽和巡察
Stay behind	敵部隊の主力が拠点地域を出発した後、小部隊が同地域に潜伏し、待ち伏せる戦法	
Jitterbug	小部隊が搭乗待機したヘリを、敵が所在する可能性のある地域に派遣し、急襲させる戦法	テンポの速い社交ダンスであるジルバに由来した名称
Eagle flight	ヘリボン作戦のこと。地上部隊の作戦の補完、戦闘効果の増大、独利的な行動などに運用 US Army Military Assistance Advisory Group Vietnam - LL. 32 Eagle Flight Operations (1963)	
Jungle bushing	戦車や装甲人員輸送車などの装軌車で行う山地地形での迅速な索敵要領	bushing→山狩り
Thunder runs	確実に存在する敵部隊や、重要な連絡道から敵を排除するために、戦車の小部隊を高速で機動させる戦法	小部隊での戦車の走行音が雷のようであることに由来
Pile on tactics	部隊が敵と接触したならば火力で拘束し、予備部隊により包囲して敵を撃破する戦法	部隊と活動する地域の規模に応じ、Rat hole（ねずみの穴）、Bull's eye（牛の目）戦術とも呼ばれた名称の由来は筆者が解釈したもの

表4：ベトナム戦争の米陸軍の基本的行動（戦術レベル）

（本文記述などを整理）

（（6）火力／機動・防護）

（砲兵の運用要領）

砲兵の支援は、地上部隊にとっては特に重要であり、支援火力の調整と運用は、米陸軍戦術の中心的機能のひとつになった。地上部隊は広く分散するため、砲兵部隊もまた分散しなければならなかった。それは結果的に、1個大隊毎の分離した支援基盤による陣地占領となった。司令官は、作戦地域内に、これらの基盤による支援が効果的になるように配置した。そのため、1、2個大隊以上の大量の火力運用はできなかった。しかしながら、多くの火砲から少ない射撃であったといいつつ、朝鮮戦争と比較して、少ない火砲で多くの任務を行った。

火力支援基盤を確立することは、主要作戦の最初の段階となった。反面、このことは、敵に作戦の開始を知らせた。一方で、火力支援基盤の欺騙再配置は、敵を混乱させた。砲兵による急襲も多用した。これは、砲兵を新しい火力支援基盤地域に投入し、多くの火力を敵位置が疑われる地域に射撃し、敵が攻撃を（打ち返しの）準備する前に撤収するというものであった。

多くの火力基盤は 105mm りゅう弾砲を含んでおり、これは人員目標に対して有効であったが、掩蔽構築物や要塞を破壊するには威力が不足した。中、重砲はこれらの目標に対してでも有効に機能した。そこで、155mm りゅう弾砲はしばしば 105mm 砲と連携し、新しい火力基盤を確立した。重砲（8 インチ、203mm）は、頻繁には移動できないため、通常いやがらせ火力、あるいは阻止火力としてベースキャンプから使用された。そこから運用し、火力支援基盤を防御することを重視したことは、ウエストモランド将軍のいう「火力基盤精神病」を導いた。米陸軍の司令官達は、ベトコンや NVA と戦うにあたって、十分な火力支援が得られない場合、リスクを負うことに消極的となっていた⁴¹。火力基盤に割かれる警戒は、戦力を割くことに外ならず、米軍の機動と攻撃能力を少なからず損なわせた一方で、米軍の死傷者を最小化することはできた。

（武装ヘリ及び空中ロケット砲兵）

武装ヘリコプター⁴²と空中ロケット砲兵⁴³（図 4）は、地上部隊に対して重要な支援を提供した。機関銃、ロケット、擲弾発射器で武装したヘリコプターは、曝露した敵部隊に対し、特に効果的な軽火力支援を提供した。空中ロケット砲兵部隊は強力な火力支援を提供し、直接支援砲兵部隊の射程を越えた地域に対して運用された。通常は全般支援任務で

⁴¹ 今日の認識では、人道上の観点から、隷下隊員の人命保護に必要な処置を予め講じることは、指揮官として必須の要件である。否定的な評価の記述となっているのは、当時の時代背景によるものであると考えられる。

⁴² 広義には対戦車ヘリコプターも含まれるが、ベトナム戦争当時は多用途ヘリコプターUH-1等を小火器やロケット等で武装

⁴³ Aerial Rocket Artillery, ベトナム戦争当時、対戦車ヘリコプターAH-1S Cobra等により編成。当時の職種は砲兵であった。

運用され、迅速な反応火力を提供した。高機動空中ロケット砲兵部隊は、極めて広範囲の要求に応えた。そして、武装ヘリコプターとともに、空中機動作戦の特別重要な任務の支援を行った。迅速な反応能力と、2つの火力支援プラットフォームは、多くの激しい空中機動作戦における不変の重要性を示した。



図4：空中ロケット砲兵（武装したUH-1）の誘導弾射撃
(<https://api.army.mil/e2/c/images/2017/02/06/465019/original.jpg>)

（米空軍の支援）

多くの点で、ベトナム戦争は、地上部隊と空軍部隊の間の連絡と協力が最も緊密に行われたと言える。米空軍の重爆弾とナパーム弾は、敵の要塞に対する攻撃に運用が適合したし、戦術航空支援はしばしば地上作戦に必要不可欠であることを証明した。

空軍のAC47ガンシップは“Puff the magic dragon”又は“Spooky”の愛称で呼ばれていたが（図5）、異なる種類の地上支援を提供した。また、DC3輸送機が、1分間に6,000発の射撃が可能なミニガン3丁で武装したが、長時間空中に留まり、暴露した敵部隊に対して、壊滅的で効果的な火力を発揮する能力を持っていた。さらに、B52戦略爆撃機が高価値目標の攻撃を開始した時、航空戦力は、スペクトラム全体での地上作戦の支援が可

能となった。ベトナム戦争における米空軍の地上戦に対する寄与は多大なものであった。



図 5 : AC-47 ガンシップ「スプーキー」

(<https://www.hurlburt.af.mil/About-Us/Fact-Sheets/Fact-Sheets/Article/204592/ac-47-spooky/>)

もしも、戦闘作戦の支援において、空中作戦の環境がなければ、南ベトナムの敵に対して浸透することができなかったであろう。この意味で、戦場における空中阻止は、朝鮮戦争の時よりも、より成功した。以前は多くの航空機で実施されたが、新しく開発されたスマート爆弾が、北ベトナムにおいて使用され、単独の航空機であっても、任務を達成できるようになった。それまで困難であった目標の阻止の成功は、将来の可能性も示唆した。

(艦砲の運用と火力支援の総括)

海上からの艦砲火力は、地上作戦支援の可能な資源の最終次元を加えた。この結果、作戦間、地上軍は、迫撃砲、砲兵、武装ヘリコプター、空中ロケット砲兵、戦術航空機、AC47ガンシップ、戦略爆撃機、または海軍火力により支援されるようになった。加えて、これらの火力支援の資源を活用するための調整は、非常に手間がかかることも証明された。

(火力統制の委任)

火力により生起するクリアランスの獲得は、火力支援調整の最もやっかいな問題の一つであった。ベトナム戦争は人工密集地で行われたため、火力発揮にあたっては、地域政

府の許可が必要であった。そのため、戦術責任地域 (Tactical Area of Responsivity, TAOR という。) の枠組を取り入れ、示すことにより、部分的にこの問題を排除した。これとは別に離隔した旅団あるいは師団は、習慣的に長い時間影響を受ける特定の地域を統制した。TAOR による場合、作戦地域は特定の作戦毎に応じた時間で指定されるため、部隊はクリアランス手続きに習熟したことに加え、地形と敵に詳しくなった。そして、それらは司令官たちの主要な関心事項となり、火力支援調整の問題は減少、大火力の運用は、米陸軍の戦術作戦において、最も重要な機能の位置付けとなった。

(機械化部隊)

機械化部隊は、歩兵部隊に機動力、火力、防護力といった戦闘能力を追加した。南ベトナムにおいて、機械化歩兵、または、装甲の予備部隊としての運用を通じ、その有用性が実証された。

敵は、洗練された対戦車武器を装備していなかったため、M113APC (図 6) は、しばしば戦車のようにも運用された。同じように、装甲騎兵分隊及び連隊は、かつて戦車及び歩兵大隊に命ぜられていた任務を付与された。これらは、伝統的な偵察、安全確保、そして経済性に追加されたものであった。歩兵部隊が、機械化機動部隊に増強されるとき、彼らは、攻撃能力の高い次元を提供した。ヘリコプターによる部品を始めとする補給品の支援は、機械化部隊を支援する能力に、作戦を維持する能力を追加した。

(米陸軍の全般総括)

火力は米軍作戦を支配した。機動力は敵を特定し、修正するために主に使用された。歩兵の攻撃力と、その運用により、敵に対する大火力の集中を弱めざるをえないことがあったのは、米軍の司令官が、彼らの部隊の強度を強める一方、彼らの損失を最小化するためであった。このような戦術は、敵の機動に対し反撃する能力に依存しており、それは、常に成功するとは限らない。バナード・W・ロジャー将軍は次のように述べている。「彼ら (敵) がよく知っている地形で、彼らが望む時に、彼らを追い払い続けることは、全く物理的には不可能であるが、現地ではそれが普通なのである」

米軍の作戦機動能力は、敵を遥かに凌いでいた。なぜならば、米軍の司令官たちは、大隊、旅団、師団を、長い距離を容易に移動させることができた。ヘリボン部隊は、戦場のどこへでも、楽に移動することができた。米軍部隊の地上の機動力は、軽装備の敵部隊に優越していた。一方で、重装備と火力への依存は、米陸軍の戦術的な機動力を低下させた。当時の旅団長は、「我らは、騒々しく、不器用で、扱いにくい。だから、用心深く、傷つき易いゲリラを捕まえるのに時間がかかった」と述べている。それは、「象がウサギを追いかける」ことに似ており、このことは、米陸軍戦術にジレンマを強いたと述べている。

米陸軍の司令官は、火力、ヘリコプター、そして機械化部隊の能力を最大化して使用する一方、敵は奇襲、機動、そして士気と、鋭い破壊に警戒することを継続した。



図 6：装甲人員輸送車 M113APC

(<https://www.army.gov.au/our-work/equipment-uniforms/equipment/vehicles/m113as4-armoured-personnel-carrier>)

(7) 戦後の議論

(ドクトリンへの教訓の反映)

ベトナム戦争の間のドクトリンの分析を踏まえ、ベトナムの経験における利点を助長するため、大きく「拡張と協調」が求められたが、多くの戦闘後レポートは、主な戦術的变化よりもむしろ、技術について強調され、細部にわたるものとなった。そして、それぞれの部隊は、任務、敵、戦闘の担当地域の地形に合うように基本的なドクトリン的方法を見直していた。一貫した要求は、それは、歩兵大隊の小銃中隊の追加の必要性についてであった。多くのドクトリン変更の提案の主な推力は、現在のドクトリンを拡張し、ベトナムにおける教訓を組み込むことであった。

(機動を重視すべきであったという批判)

南ベトナムにおける米軍の戦術に対して、多くの批判が向けられた。デイ・R・パルマー大佐は、「麻痺戦術を完全に除外した、全てに対する火力戦術への依存」を批判した。彼は、「麻痺戦術はより広く使用されるべきである」と提案した。しかし、一方で、歩兵

の攻撃は、20世紀を通じて、困難さと不経済的さが増大したといった事実が概観された。敵の歩兵武器と、彼らのしばしば第一次世界対戦の陣地のような塹壕の迷路とトンネルを伴う防御陣地の強さの殺傷性は、過小評価された。パルマー大佐の暗黙の主張は正しく、敵と接触する部隊の機動は、もっと積極的に使用されるべきであった。

(技術重視と殲滅戦に対する批判)

デビッド・H・ハックワース中佐は、米陸軍の戦術に対する最も説得力のある批判者の一人となった。彼はいう。「ベトナム戦争から、記録されるべき最も重要な教訓は、軽装備で不十分な補給のゲリラ部隊に対しては、世界で最も強く洗練された陸軍をもってしても、従来戦術を使用するのみでは、簡単には撃破できないということである。...ゲリラを撃破するためには、我々はゲリラにならなければならない」

他の出版物において、ハックワース中佐は述べている。「私が見たように、ベトナムにおいて、我々の国は、ハンマーを携えてハエを殺そうとしてきた。ハンマーは、仕掛けと小道具でできていた。我々は国内の生産ラインでたくさん組み立てられた大量の爆弾、弾丸そして装備品の雨により、敵を降伏させようとしてきたのである」ハックワース中佐は、友軍は、ゲリラ戦術を運用すべきであり、技術と火力に偏重するべきではなかったと述べている。

これに対し、ゼブ・B・ブラッドフォード Jr 中佐は、米陸軍は、「充実した数の兵士を育成することができなかった」と、ゲリラ戦士が効果的に機能するためには、より高い質が必要であることとともに語った。また、米軍の兵士は、米国においては、ゲリラ戦士として効果的に機能できる一方で、彼らの能力は、他の環境においては限定的であった。

ハックワース中佐の意見に対する他の反応は可能であった。米陸軍の関心は明らかに技術的な装置に集中していた。例えば、米軍の司令官達は、もし、彼らが、大火力を使用することができなかったならば、部隊を犠牲にしていたであろう。また、ゲリラ戦術の使用は、常に、戦死者を増加させる結果となっていたに違いない。そして、厭戦ムードが増加し、これらの損失を受け入れることはできなかった。

一方で、敵に対するゲリラ戦術が、従来戦術よりもより成功を収めたかもしれないとの見解を裏付ける証拠もなかった。戦争は進化し、ベトコンの損耗は、彼らの募集の能力を越えた。米国の戦争への関与の終わりまでに、NVAは損失の許容量を超え、彼らが戦った戦闘は、(米陸軍にとって)しばしば退屈なもので、やがてゲリラ戦闘に回帰した。米軍の部隊は、敵に対しておびただしい戦死者を与え、多くの軍事指揮官は、米陸軍部隊は、戦場では撃破されていなかったと述べている。

(戦略に対する批判)

戦争の最終的な結果は、米陸軍の戦術をかばうことはなく、多くの疑問を残した。米国の技術は、米国の地上戦が終了した時、北ベトナムに勝利していたわけではないため、正しかったと、考えるべきではない。米軍は1965年3月から1972年8月までの7年5ヶ月の間、南ベトナムで戦った。この間、敵は多くの損失に直面し、我々は多く勝利した。しかしながら、これらの勝利によって、南ベトナムが撃破されなかった訳ではなく、火力の抑制されない使用は、鎮静させるための努力を減じた。

失敗の原因は、恐らく戦術というよりも戦略の分野にあった。ある人は「我々はすべての戦闘に勝利した。しかし、米国は戦争に敗北した。...この理由は、(朝鮮戦争後)14年の何も(進歩の)なかった我々の戦略にあった」彼は付け加えた。「戦場におけるボディーカウントは、戦闘の結果や人間の心を決して表さなかった」彼は、結論した。「COINで重視された無差別な火力⁴⁴、そして、戦略が従来戦ではなく、COINと鎮圧にフォーカスされていたなら(異なる結果となっていたであろう。)」与えられた戦略、そして政治的状況下、南ベトナムにて使用された戦術的方法に対する1965年から1972年にかけての実行可能な代替案は、今更提示することに意味はなく、今日となつては最早それ以上のものはない。戦闘に勝利することは、戦争に勝利することではない。進化した戦術的方法は、恐らく戦争の最終的な結果を変えることはできなかったであろう。

(兵士を巡る問題)

ベトナム戦争は、米陸軍に大きな影響を与えた。ハミルトン・H・ハウゼ将軍は、概観した。「我々の部隊は、最初の3、4年は特によく戦った。示された立派な個々の技術と任務に対する献身は素晴らしいものであった」それ以降の段階において、米陸軍のパフォーマンスは変化した。ハウゼ将軍によると「いくつかの部隊」は、「将校に背き、あるときは彼らを殺害しようとした。そして、薬物の乱用と粗暴が広がり、部隊は戦闘能力を急速に失った」これらの問題は部分的⁴⁵に、南東アジアにおける戦闘の本質に帰するとする一方、リーダーシップ、指揮、そして訓練の基本的な問題を提示した^{46 47}。

⁴⁴ COINにおいては、本来火力は重視されない。

⁴⁵ 一部に1968年頃から士気の低下が見られ、それにとまらぬ軍規の弛緩があった。三野 前掲 8) P.100

⁴⁶ ベトナム戦争当時の兵の質・軍の規律は著しく低下したと言われており、このことを教訓として米陸軍はその後の人材の確保(徴兵制から志願制へ)、人材の育成・開発、そして規律などに力を入れることとなる。この点も含め、組織の建て直しに20年を要したと言われていた。

チャールズ E.カークパトリック、高井三郎訳「湾岸戦争に勝利を収めた平時軍備政策—ベトナム戦争後20年間の米陸軍」、陸戦研究, 5.3-5

⁴⁷ ベトナム戦争期の米軍は「ゲッターの通りから連れ出された徴兵の軍隊」であった(「ゲッター」とは、かつてユダヤ人を強制的に収容した居住区域、(中略)米国における黒人居住区域(ハーレム)を黒人ゲッターなど呼んだ。(ブリタニカ国際大百科事典小項目事典))。米軍は1980年代以降、「わが軍の男女兵士が再び軍服を着ることを誇りに思えるようにするため」(レーガン大統領)、給与改善、昇給機会の増大、快適な環境づくり、教育補助、職業訓練、奨学金制度の拡充、人種差別や性的嫌がらせの防止、麻薬やアルコール中毒の追放、広告代理店を利用した宣伝作戦、装備や訓練の充実など自己改革を進めた。松岡・前掲 55) 163頁。

（（8）戦争の評価（軍事戦略以下））

（総括）

その後の米陸軍の戦術的思考は、南東アジアにおける長い戦争から多大な影響を受けた。戦争の10年の間、米陸軍の関心は、ベトナムにおける歩兵中心の戦争に固定され、米陸軍は小部隊の作戦に慣れ、戦場における敵に対する量的な優越を満足したに過ぎなかった。火力と敵の殲滅の重視は、この戦争における新たな高みに到達した。皮肉にも、1960年代初期におけるCOINに関する思考の方向修正のための偉大な取組も、米陸軍として従来戦に焦点を当ててしまったため、生かすことはできなかった。

（ベトナム戦争の教訓とその後）

ベトナムでの経験は、その後の米軍の戦略に大きな影響を与えた。簡潔に言えば、米軍がベトナム戦争から得た教訓は、COINを重視せよというものではなく、米国は他国の内戦に関与せず、正規戦に集中すべきだというものであった。そして、ヨーロッパにおけるソ連軍との大規模な戦争に備える道を選択することになる。この背景には、ベトナム戦争に多くの関心と勢力を注いでいた米軍の兵器開発が大きく遅延した一方で、1960年代後半からソ連が、軍事力増強を行なったため、西側諸国に対する脅威が増大していたことも、一因としてあったと言われているが、東南アジアの発展途上国との戦いを通じた、作戦、戦略上の敗戦と不名誉な撤退は、米国にトラウマを与えたと見ることも可能であろう。

つまり、圧倒的な軍事力を背景に、戦術レベルでの優勢を概ね全期間を通じ保持し続けた米国が戦略的敗北を喫したのは、第1に、当時の指導者達が、「適切なマネージメントを通じて効率的に戦争を遂行する」という視点を設定、すなわち、戦争を科学（サイエンス）としてのみ捉え、実践、術（アート）としての捉えなかったことによる戦争の本質を見誤り、第2に、「敵の物理的破壊を累積することによる勝利の獲得」という戦術レベルでの方法論が、戦略目的の達成に寄与しなかった点に収斂されるといった点が要因（教訓）と指摘されている。

ベトナム戦争の轍を踏まない、同じ失敗を二度と繰り返さないという決意の下、古典の研究に取り組んだ米軍人達は、クラウゼビッツに魅了され、戦争と政治は不可分のものであり、軍事的勝利は自動的に最終的な戦争の政治的勝利を保証するものではなく、全て戦争は政治的支持と国民の同意を必要とする、すなわち軍隊は戦争に勝利するための三位一体を構成する一つに過ぎないといった洞察に至ったのである⁴⁸ ⁴⁹。（了）

⁴⁸ クラウゼビッツに加え、孫子も注目され、この時期以降研究が盛んに行われるようになったとの指摘もある。

⁴⁹ 1973年、Continental Army Command (CONARC) と Combat Development Center (CDC) が保持していたそれぞれの任務の一部を集約した Training Doctrine Command (TRADOC) がバージニア州フォート・モンローに設立された。